戦争が終わった。勝ったらしいが勝敗は既にどうでもよくなっている。顔見知りは戦争の間にずいぶんと増え、ずいぶんと減った。目の前で死んだ相手も、異なる戦線に飛ばされた相手もいる。後者の安否を確認する余裕は、無かった。ただ、早く帰りたかった。

その願望は割と簡単に叶った。終戦を迎えたのが港町だったのは不幸中の幸いだった。広い甲板で潮風を浴びながら、小さくなっていく大陸をぼんやりと眺める。もう二度と来ることはないだろう。いくら積まれても来たくはないものだ。

目を閉じると昨日のことのように戦場での出来事が思い出せてしまう。戦場はまさに地獄だった。戦場こそが地獄だった。地獄とは戦場だった。地獄とは死後にのみ経験できるものではないと知った。三年もの間、地獄にいながら死なずに済んだのは、おそらくは想い合っていた想い人の言葉のおかげだった。

「この花畑で待ってるから」

色とりどりの花が季節ごとに咲く、見事な花畑だった。教えてくれた彼女は恥ずかしそうに、おれだけにしか教えてないと言った。それに「うん」とだけ返した。それは後に、後悔になった。後悔を残したままでは死にきれなかった。こどものようだと自覚しながら、遮二無二に走り続けた。打ち続けた。切り続けた。殺し続けた。生き続けた。

国都には下りず、乗船を続けて南へ下った。国都にある実家は既に焼け野原の一部と化してしまっていることは半年前の手紙で知っていた。そうではなくとも南へ下ったが。おそらく。

軍港に停泊した船から降り、そこからは歩いた。国都ではなく南地方までゆく理由を周囲に知られてしまっていたために車の手配をすすめられたが、おれは固持した。

一年と二ヶ月前を境に、彼女からの手紙は途絶えていた。その事実が意味するものが何か、考える時間が欲しかった。今の今まで考えないようにしていた。ことを今になって考え始めた。

海沿いの道を歩き続けた。軍服を着ていると目立ってしまうことが途中でわかったので、途中でアロハシャツに着替えた。それはそれで目立ったが、集める視線に含まれた感情が同情から奇異になったのでよっぽど楽になった。

着替えた後も声をかけられた。よかったら同乗しないか、と。そのたびに断った。疲労で身体がくたくたになっても、同じことを言った。歩きたいので、と。

私は車に乗りたくなどない。私は歩いていたかった。休んでいたくなどない。必要以上に休んでしまうと、無駄なことを考えてしまう。考えてしまうと、病気がちだった彼女がなぜ手紙を送ってくれなくなったのか、最後の手紙の途中からなぜ筆跡が変わったのか、などの疑問の答えを導きだしてしまえる気がした。

二週間歩き続け、花園が広がる海沿いの高台へ続く坂を上るところまでついに来た。疲労は当然あるが、足を止めずに進み続ける。上の方から穏やかに吹いて来る風は、花の香りを運んできた。私は楽になりたい一心で、そこへゆく。そして、着いた。光指す花園に咲く花は色とりどりで、美しかった。その中央に、石があった。確かめるまでもなく、墓石である。

私は、銃弾を一発だけ残している。あとは、銃本体を用意するだけだ。